

親和力

扉を叩いても叩いても
己が魂の中に押し入ること叶わず
その間にも絶え間なく
僕の襟首をつかんで引く者は引きもきらず
ああ、忘却を強いる者は時間に非ず

傷付くことを許されず
嘲笑にさえも見放されるとあらば
生活への活力にしか身を投ずる場はなく
そのコロッセオに充ちた冷やかな微笑は
我が成功をもって満ち足りんと欲する

異質なものは次々と奪い去られ
ただ同化へと継ぎ接ぎされるうち
まがりなりにも、僕は確かに「人」となつたらしい
それはもしかしたら人々の信仰であつたかもしれない
つまり、己を肯定しようとする

今や朽ち果てた目を見開いて力をふりしぼり
僕は浅はかにも市井の者達に唾を吐きかけた
しかし烏合の衆は数に物言わせ、僕を組み伏せた
ああ、その力はいかにも強過ぎた
継ぎ接ぎだらけのこの僕には・・・

(1992.2.3)